

「人生の達人は、音楽の達人である」とは毎年1月に開催される高円宮殿下メモリアル・マスターズオーケストラキャンプの会場に掲示される言葉です。現代はすべてが変化することを外から強制される時代といえるようです。そして限られた成功企業がそうであるように、マスターズオーケストラの皆さんは、現代に最も難しいと言われることをされています。それが「やり続ける」という一貫性です。

ちばマスターズオーケストラは、同様に千葉県から音楽を通しての戦後復興と啓蒙活動に貢献された、村上正治先生の一貫性を継いで結成されたオーケストラです。私は光栄にもその第1回演奏会でお手伝いをさせていただき、共に演奏する中で、メンバーのみなさんの音楽に対する変わらぬ情熱と、その喜びを1人でも多くの人に届けたいという熱意を感じました。それはまさに、音楽により磨き上げられた人生であり、人生により深められた音楽でした。

このようなちばマスターズオーケストラは、今回同じ千葉県の才能ある音楽家2人から強力な支援を頂きました。指揮の**田久保裕一さん**は、プロのオーケストラに多忙な現在でも、一貫して全国のアマチュアオーケストラや合唱団の育成に尽力していられています。ヴァイオリンの**瀬崎明日香さん**は先ごろNHKテレビで放送された、障害のある人となない人がオーケストラを結成し演奏するというバリアフリーの「こころコンサート」で、コンサートミストレスを務められた方です。本日はこのメンバーでどうぞ「人生の達人」の音楽を存分にご堪能ください。

ヨハン・シュトラウス 喜歌劇「こもり」序曲

ウィーンで活躍しワルツ王と呼ばれたJ.シュトラウスII世の代表的なオペラのオープニング曲です。

主人公アイゼンシュタインは大晦日の晩、大金持ちのパーティーに招待されます。そこでハンガリーの貴婦人に出会い一目ぼれ、秘蔵のアクセサリ時計を餌に口説きにかかります。ところがそれは自分の奥さんの扮装、パーティーの招待客は全員グルで、浮気をとっちめられるというストーリーです。この騒動を仕掛けたファルケ博士のあだ名が、このオペラのタイトル名“こもり”の由来です。

曲はオペラ中のウィーン情緒あふれる名旋律が次々と現れます。特に印象に残るのは、中ほどに出てくるワルツで、このオペラの中でも、豪華なパーティーで踊られるシーンで使われています。シャンパンの泡立ち、乾杯グラスの鈴のような響き、セクシーなドレス、シャンデリアの輝き、ダンスの音楽とステップ、香水、そして恋の駆け引き、それらがあふれるイメージを想像しながらお聴き下さい。

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調

「この曲の出だして、モーツァルトの40番に似ていませんか?」。知人のヴィオラ奏者にそう問いかけたらすぐに賛同をいただきました。**第1楽章**のテンポは共に *Allegro molt* で、心を揺さぶるような八分音符にのってアウフタクトで始まる

ヴァイオリンのメロディ。クラシック音楽ファンでなくても耳になじんでいるこの2つの名曲に私は不思議なつながりを感じます。

メンデルスゾーンは1809年ドイツのハンブルグで裕福な銀行家の息子として生まれたユダヤ人です。若くして音楽の才能を発揮し、少年時代に文豪ゲーテと知り合いだったり、彼のコンサートには哲学者ヘーゲルや詩人のハイネが聴きにきたりと、その生涯は華々しいものでした。

また、それまでの音楽家は自作の発表をメインに活動していたのですが、メンデルスゾーンは作曲者の死後永く忘れられていたバッハの「マタイ受難曲」やベートーヴェンの交響曲を再演したり、シューベルトの遺作交響曲「グレート」を発掘・初演したりと、現在の指揮者の活動基盤を作った人でもあります。

38歳という若さでその生涯を終えたという病弱なイメージがありますが、死の前年まではピクニックを楽しんだり活動的な人でした。良き理解者であった姉の死をきっかけに体調を壊したといわれています。

曲は速い- ゆっくり - 速いの3つの楽章が中断なく続けます。そして、**第1楽章**と**第2楽章**のブリッジには情熱的な気分の余韻から優美なメロディを引き出すようなファゴットの持続音が、**第3楽章**の冒頭では独奏ヴァイオリンがそれまでを再び振り返り語り掛けるようなフレーズが挿入されています。

フォーバルスカラシップ・ストラディヴァリウスコンクール優勝の栄冠を受けた瀬崎明日香さんの音楽を存分にお楽しみください。

ベートーヴェン 交響曲第7番 イ長調

ベートーヴェンは葬送行進曲つきの交響曲を2曲作曲しています。ひとつは『英雄』と呼ばれる第3番、そしてもうひとつが、今回お届けする第7番です。

この2つの**第2楽章**を比べてみると、『英雄』の葬送は、一人の英雄を弔うためのように思われます。ぬかるみの道を、自らが重い棺を引きずるような足取りと、死者の冥福を祈るような中間部を持ちます。一方今回の第7番は、ならされた道を厳かに進む葬送の列を、主人公が道沿いで見守るかのようで、中間部では死者との思い出に浸ります。

第1楽章は気品あるオーボエソロで始まるイントロと、若々しい明瞭さを持つリズムカルな曲です。音楽大学を舞台にしたテレビのラブコメディ『のだめカンタービレ』のオープニングテーマに選ばれたことがうなずけます。**第3楽章**は速い3拍子のスケルツォで、軽妙なバレエのステップを思わせる表の顔と、自分の内面を見つめる内なる顔が交互に現れます。そして一番のお楽しみは**第4楽章**です。「はしゃぎすぎ」と言いたくなる躍動感あふれるリズムとシンプルなメロディの繰り返しエネルギッシュなクライマックスをもたらします。

『英雄』はベートーヴェンが耳の病気の苦しみから立ち上がった記念碑的な作品ですが、この第7番には、その苦悩を完全に乗り越え、成功を手にしたベートーヴェンの自信に満ちた姿が伺われるように私は思います。